



Title	段階形容詞の修飾のあり方：段階形容詞とその次元が成り立つ領域との関係に基づく分析
Author(s)	包, 雅梅
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 94-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90721
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

段階形容詞の修飾のあり方

—段階形容詞とその次元が成り立つ領域との関係に基づく分析—

包 雅梅

1. はじめに

(1)が示すように、日本語の形容詞「多い／少ない」は装定用法(1a, b)と述定用法(1c, d)の両方において使用制限がある。

- | | | |
|-----|-------------------------------|-----------|
| (1) | a. *多い人が庭に集まっている。 | 仁田 (1980) |
| | b. *きのう電車事故があつて、少ない人がけがをしました。 | 寺村 (1991) |
| | c. ??クジラは多い。 | 佐野 (2016) |
| | d. ??鶏肉は少ない。 | 包 (2022) |

使用制限がある理由について、包 (2022) は「多い／少ない」は段階形容詞としてその次元が成り立つ領域 (domain) が指定されなければならないからだと主張した。そして、次元が成り立つ領域を指定する一つの方法として「X は Y が<段階形容詞>」のような構文が利用されると述べた。しかし、「高い」のような段階形容詞は、「多い／少ない」と異なり、単独で使うことができる。これについては、実際は「高さが高い」という解釈が背景にある (小川他 2020 を参照)、つまり、「高さ」が次元が成り立つ領域として潜在しているためであると説明している。

一方、「多い／少ない」も「数が {多い／少ない}、量が {多い／少ない}」の省略だと考えられそうであるが、実際には単独で述定と装定の位置に現れることができない。しかも、(2)のように「数が／量が」を補っても文が容認されないままである¹。包 (2022) では、「高さ」と「数／量」は次元が成り立つ領域である点で「高さ」と同じであるが、両者の性質の違いによってこのような差が生じると述べた。

- (2)
- | | |
|----|---------------------------------------|
| a. | * <u>数が多い人</u> が庭に集まっている。 |
| b. | *きのう電車事故があつて、 <u>数が少ない人</u> がけがをしました。 |
| c. | ??クジラは <u>数が多い</u> 。 |
| d. | ??鶏肉は <u>量が少ない</u> 。 |

しかし、(3)のように、「X は {数／量} が {多い／少ない}」、「数／量」が {多い／少ない} X」が容認される場合があり、これについて包 (2022) は説明を与えていない。本稿では、(1)が容認不可である理由として、「多い／少ない」が述語として使われる場合は主語の、装定する場合は被修飾名詞の「数」的あるいは「量」的な側面を表しはするものの、

数量詞（3人、3頭…）のように被修飾名詞そのものの「数／量」を表さないからだと論じる。かつ、被修飾名詞は「数」あるいは「量」という側面を持ちうるものでなければならず、(2)における「人、クジラ、鶏肉」は「数／量」という側面を持つと考えられないため、容認不可になると主張する。さらに、この主張に基づけば、「Xは{数／量}が{多い／少ない}」、「数／量」が{多い／少ない} X」が容認される場合(3)についても説明が可能になる。(3)は、「数／量」が名詞が指すXの一側面として解釈できる場合であるため容認されるのである。そのような解釈が可能になるかどうかは文脈に依存する。詳細は第3節で論じる。

- (3) a. 人類が絶滅するときって他の動物よりも悲惨な物なんじゃないかな？でしょね。
人間は数が多いし泣いたりわめいたりするので他の動物と比べると悲惨で見苦しいかも。
 (BCCWJ)²
- b. なんかも時々食べたくなるので、ホワイトソースを買ってきてちゃちゃっと作って食べますが、めちゃくちゃ大盛りにしてオープンに入れます（笑）。どうも小さい頃から食べていたグラタンは量が少なくていつも「もっと食べたいのに～」って思っていたような気がします。
 (BCCWJ)
- c. ああいう小さくて数が多い虫は大嫌いです。
 (jaTenTen11)³
- d. 来栖氏のリクエストは「料理は3万円でやって欲しい」だったそうです。アイテムだけみると凄い食材と調理の連続ですが、量が少ない小皿料理みたいなもの。私が頼んだ昨日の2万5000円コースとそうは大差のない内容でありました。
 (jaTenTen11)

さらに、第4節では、「多い／少ない」が被修飾名詞そのものの「数／量」を表さないのは、段階形容詞の一般的な特徴によること、つまり、「XはYが<段階形容詞>」という構文において、段階形容詞はXではなく、Yの性質を直接表すという特性を持つことを論じる。段階形容詞が装定の位置に現れる場合についても、直接被修飾名詞を修飾しないと主張する。第5節では、以上のような仮定に立つことによって、「多い／少ない」の述定用法と装定用法における使用制限を統一的に説明することが可能となることを示す。

まず、次節では、被修飾名詞の一つの側面としての「数／量」とは何かを考える。

2. 段階形容詞の次元とその次元が成り立つ領域

被修飾名詞の一つの側面としての「数／量」は「富士山は高さが高い」における「高さ」と同じく次元が成り立つ領域である。次元 (dimension) 及び次元が成り立つ領域 (domain) について、以下で概要を述べる。

Cresswell (1976)、Kennedy (1999)、Kennedy & McNally (2005)などは、段階形容詞は個体

とスケール (scale) 上の度合い (degree) との関係を表すと指摘している。スケールには度合いの集合 (set of degrees)、次元 (dimension)、順序関係 (ordering relation) という3つのパラメーターがあるとされる。次元について、Kennedy (1999)は以下のように述べている。

I will define a scale as a dense, linearly ordered set of points, or “degrees”, where the ordering is relativized to a dimension. A dimension corresponds to a gradable property such as height, length, speed, density, beauty, etc., and provides a means of differentiating one scale from another. (Kennedy 1999: 43)

つまり「height, length, speed, density, beauty」といった形容詞自体が表す段階性のある性質が段階形容詞の次元 (dimension) ということになる。

小川他 (2020) も同様の立場で、日本語の段階形容詞は(4)のような冗長表現ができ、二重主語構文⁴に現れることを指摘し、日本語の段階形容詞はガ格によって次元を指定すると説明している⁵。

- (4) a. 高さが高い／背が高い／年齢が高い／値段が高い／価値が高い／人気が高い／音が高い／気温が高い／湿度が高い…
b. あの壁は、高さが高い。
c. あの壁は、高さが低い。 (いずれも小川他 2020)

一方、Kennedy (2001) および Kennedy & McNally (2005)は、(5)のような文が容認されるのは、下線部の異なる段階的形容詞が同じ次元 (抽象的な linear extent という次元) を持つからだと説明している。前の記述と合わせると、「height, length, width」も次元で、抽象的な linear extent も次元ということになる。すなわち、Kennedy (2001)や Kennedy & McNally (2005)は次元には2つのレベルのものがあるとしていると言える。

- (5) a. The space telescope is longer than it is wide. (Kennedy 2001:37)
b. They call him 'The Bus' because he's kind of as wide as he is tall. (Kennedy & McNally 2005:352)
c. [This comparison] is unfair both to him and the quarterbacks like Dan Marino and John Elway who excelled for almost as long as [Peyton] Manning is old. //

本稿は、異なる段階形容詞で比較できるのは同じ次元を持つからだという Kennedy (2001)や Kennedy & McNally (2005)の考えを受け入れるが、次元については異なる仮定をとる。以下で、次元に加えて次元が成り立つ領域という概念を導入する理由を述べる。

日本語の段階形容詞と英語の段階形容詞には異なるところがある。まず、小川他 (2020) が指摘しているように、(4a)の各表現は英語では一語で表すことになる場合が多い。すなわち、(6)の表現は日本語では同じ「高い」という形容詞を用いて表現するのである。また、(7)が示すように、日本語は英語と異なり、段階形容詞は(5)のような構文に現れない。

(6) tall, old, expensive, valuable, popular, loud, warm, humid ... (小川他 2020)

- (7) a. *このテーブルは高いより長い。
b. *このテーブルはあのテーブルが長いより高い。

もしガ格が次元を指定すると考えると、「高い」という同じ形容詞が用法ごとに異なる次元を持つことになるが、そうすると「高い」のすべての用法において何が共通しているかが問題となる。これは、次元という一つの属性だけを設定しているために生じる問題である。前述のように、Kennedy (2001)や Kennedy & McNally (2005)は、linear extent と height, length, speed のような異質な特徴を次元という一つの概念で捉えようとしている。しかし、両者は異なるレベルのものであり、実際、日本語では両者は異なる方法で表される。このことは、抽象的なレベル(linear extent など)とそれが成り立つ具体的なレベル(height, length, speed など)を区別する必要があることを示している。したがって、本稿が主張するように、次元という抽象的なレベルとそれが成り立つ領域という具体的なレベルの二つの段階を設定することが妥当であり、日本語の段階形容詞の特徴をより適切に捉えることができる。

そこで、本稿は包 (2022) と同様に、(8)の各文における下線部は形容詞が表す次元の成り立つ領域であると考える。

- (8) a. 富士山は高さが高い。
b. バスケットボール選手は背が高い。
c. この詩人は人気が高い。
d. 8月の夏の盛りとはいえ、やっぱり高原は気温が低い。

さらに、(8)から分かるのは、下線部の名詞句は、ハで標示された名詞句 X (以降、「大主語」と呼ぶ) が指し示す事物の一側面の特徴であるということである。例えば、「高さ」は「富士山」の性質の一つであり、このことは「背」と「バスケットボール選手」、「人気」と「詩人」、「値段」と「そのコンピューター」についても同様である。一方、「多い／少ない」は数量を表し、数量がものの内在的に有する性質ではない (仁田 1980 を参照)。つまり「数／量」は「高さ、背、人気、値段」などと異なり、ものの一側面にならないという

説明である。実際、(2c,d)に見られるように、「多い／少ない」は一般の段階形容詞と異なり「数／量」のような領域を明示しても容認されない場合が多い。しかしながら、文脈によっては、「{数／量}」が「{多い／少ない}」という表現が許容される場合もある。これは、「数／量」が大主語の一側面であるという解釈が可能であるためと思われる。次節では、「数／量」がものの一側面の特徴として解釈できる場合があることを示す。

3. 次元が成り立つ領域としての「数」と「量」

(9)と(10)が示すように、「XはYが{多い／少ない}」、「Yが{多い／少ない}X」におけるYが「量」の場合に文が容認されることがある。

- (9) a. このラーメンは量が多い。 (作例)
b. この弁当は量が多い。 //
c. イタリア料理は、量が多いね。 (BCCWJ)
d. このようにCADデータは量が多く、かつ機密性も高いので、安全で広帯域の情報ネットワークが必要である。 //
e. 千四百kcalや千六百kcalを選択する人が、せっかくのおいしいスープを残さなければならぬのは、油が多く含まれているためです。ごはんは量が少ないので全部食べられます。 //

これらの文における「多い／少ない」とXに当たる名詞句の関係を考える。(9a,b)を例にとると、ラーメンが何杯か、弁当が何個あるかは問題にされておらず、ある1つしかないものについて、「量」という側面があり、その「量」という側面に注目すると、典型的な解釈として他のラーメン、弁当よりは多い方だという解釈が考えられる。つまり、「多い」は数量を表すが、それらの文では「多い」が「このラーメン」と「この弁当」そのものの数を表しておらず、それらの量的側面について叙述している。(9c,d,e)も同様である。(9c)は量という側面からいうとイタリア料理は多い方だと述べているのであり、目の前にイタリア料理がたくさん並べられているといった意味ではない。(9d)は「量」と「機密性」が並列的に使われ、両者ともCADデータの1つの側面である。(9e)における「ごはん」は(2d)の「鶏肉」と異なり、「その一杯のごはん／そのセットにあるごはん」といった意味で、1つの定まった指示対象を持つ。その指示対象は「量」という側面からいうと少ないという意味である。

さらに、(10)のような装定用法の場合も、(9)の各例と同様に、Xにあたるものそのものが複数あるという意味ではない。(10a)では、軟膏を何本かを出すという意味ではなく、一本の軟膏でボリュームのある軟膏を出すという意味である。(10b)では、商品が何種類かあるいはいくつかあるという意味ではなく、内容物の量が多いという意味である。(10c)でも、

醤油ラーメンが何杯かあるのではなく、一杯のラーメンで量が多いという意味である。(10d)でも、「多くの物」はという意味ではなく、「量的に多いその種類の物」という意味である。(10e)も同様に考えられる。

- (10) a. 量が多い軟膏を出しますので、お尻も股にもたっぷり付けて上げてください。
 b. 安くて量が多い商品ほど好まれている。
 c. あそこはシンプルな醤油ラーメンというか、量が多い醤油ラーメンだな。もし時間があるなら、神保町か関内の店で食べてみて。小滝橋通り店とは全然ちがうから。
 d. 量が多い物は価値が下がり、少ない物は上がる。これは経済学の常識。
 e. 量、品質の安定というのが市場、スーパーで取り扱うために必要。美味しいけど量が少ない野菜や魚は、悲しいかな市場に出せない。(いずれも jaTenTen11)

次に、「XはYが{多い／少ない}」、「Yが{多い／少ない}X」におけるYが「数」である場合を見てみよう。(11)と(12)のような文が見られる。それらの例は、Xが一つの確定した集合を表し、その場合その要素の数が集合の一つの側面となる。すなわち、「数」が1つの集合の数的側面を表せる点で、「量」と同様に扱うことができる。(11)では、Xに当たる名詞句の対象物そのものの数を表していない、つまり、団塊世代が何個かある、人間という種が複数いるという意味ではない。(11a)では、「団塊の世代」は1つの集合であり、その集合に属する人の数が他の世代に属する人の数と比べて多いという意味である。(11b)では人間が他の動物と並列に挙げられている。人間という種はそれに属する個体の数が多いという特徴を持っているという意味であると考えられる。(11c)も同様に考えられる。

- (11) a. 団塊世代は数が多いので、政府も企業もその要求を無視できない。(BCCWJ)
 b. 人類が絶滅するときって他の動物よりも悲惨な物なんじゃないか？でしょうね。
人間は数が多いし泣いたりわめいたりするので他の動物と比べると悲惨で見苦しいかも。(3a)の再掲
 c. …白い馬は数が少なく見た目も美しいからだろう。(BCCWJ)

装定の場合も同様であり、「多い／少ない」が被修飾名詞のXに当たる名詞句そのものの数を表していない。(12a)では、総合問題という問題がいくつかあるのではなく、1つの総合問題に複数の問題があるという意味である。(12c)では、良性結節と悪性病変の結節の2つの集合があると考えられ、前者の集合は後者よりはるかに数が多いという意味である。(12d)では、1人1人の看護師が複数いるという意味ではない。その病院の看護師全体を一つの集合として設定し、それに属する要素(一人一人の看護師)の数が多いと述べている

のである。(12e)では、カマイルカが一頭、二頭複数いるという意味ではない。カマイルカという種を一つの集合として設定し、それに属する個体数が多いという意味である。(12f)では、編隊という集合において、それに属する個体(戦闘機)の数の多寡を述べている。

- (12) a. 問題の種類や数が多い総合問題なので、読解力だけでなく、総合的な英語力が必要。
- b. しかし、はるかに数が多い良性の結節の中から、ほんのわずかの悪性病変をかき出すのは難しいことです。
- c. 病院の職員で圧倒的に数が多い看護師の定員を増やすことは病院経営を容易に圧迫します 7:1 のような制度がない限り、看護師の定員を増やしても病院経営から考えるとメリットはないので決して増員されません。
- d. 鴨川シーワールドの「キララ」です。キララは、現在も、鴨川シーワールドで元気に飼われています。野生生物の生態を知るのは、難しいですね。数が多いカマイルカでさえ、こんな状況です。
- e. 二回目の攻撃で 99 艦爆や 97 艦攻の装備に時間がかかりすぎて日没になりそうな場合などは撃墜が少なく数が多い編隊を減らしてもよい。

(いずれも jaTenTen11)

ここで問題となるのは、(9), (10), (11), (12), (2)はいずれも「数が {多い／少ない}」、「量が {多い／少ない}」という表現をとっているにもかかわらず、(9), (10), (11), (12)の各例と(2)に容認性の違いがあるという事実である。それは、「多い／少ない」が直接被修飾名詞そのものの数量を表すのではないことと関係すると考えられる。(9), (10), (11), (12)のような表現が成り立つためには、「多い／少ない」が被修飾名詞を直接量化せず、「多い／少ない」が被修飾名詞の「量」、「数」的な側面の性質を表し、かつ、被修飾名詞が「量」、「数」的な側面の性質を持ちうるものでなければならない。すなわち、「多い／少ない」の次元が成り立つ領域としての「量」は、被修飾名詞の一つの側面の性質であり、だからこそ、1つしかないものであっても、「量が {多い／少ない}」と述べるのであり得るのである。それと同様に、次元が成り立つ領域としての「数」は1つの確定した集合の側面である。

一方、(2)のような被修飾名詞が不定名詞句の場合⁶、それが「量」的な側面の性質を持つとは考えられず、1つの確定した集合であるとも考えられない。その場合、包(2022)でも論じられているように、「多い／少ない」は被修飾名詞を「多い／少ない」の次元に沿って構成されるスケールにマッピングすることになる。つまり、大主語の対象物そのものが多いか少ないかについて測られて判断される場合、対象物の性質に応じて、その次元は「数」か「量」になる。しかし、その場合は比較の基準が決まらないため、解釈が成り立たなくなってしまうため、(2)の各文は容認されない。

(2)のような文が (13)のように比較構文や存在構文で現れると容認される。その場合は大主語の比較基準が決まるからである。存在構文における存在物を表す名詞句は不定であるものが多いため、その場合は存在する対象物そのものが測られていると考えられる。存在構文の場合、比較基準が何になるのかは文脈によって決まる。可能性として、「太平洋側以外のところのクジラ」「太平洋にいる他の魚類」などが挙げられる。

- (13) a. クジラはイルカより {多い／少ない}。
 b. 太平洋にクジラが {多い／少ない}。
 c. 牛肉は鶏肉より {多い／少ない}。
 d. このお弁当に鶏肉が {多い／少ない}。

この議論に基づけば、(10)(11)における「量」と(12)(13)における「数」は、下記の(14)(15)における「寺、人、山、子ども、子音、軟水、コレステロール、乳漿、脂肪、水分」と同列のものと位置づけられる。すなわち、「数／量」は被修飾名詞の一側面で、次元が成り立つ領域ということになる。

- (14) a. 今でも京都は寺が多いが、百年前はもっとずっと多かったのである。
 b. 東京は人が多いため、回りの人に対する関心が地方ほど高くない。
 c. 東美濃は山が多い。
 d. その人は子どもが多いからすでに二軒借りて住んでいるんです。
 e. 日本語は子音が少ないよね。 (いずれも BCCWJ)
- (15) a. 日本の水は軟水が多く、水に恵まれています。
 b. 卵はコレステロールが多いから、食べないほうがよい？
 c. ついでですが、一キロの澄ましバターをとるには、日本のバターは乳漿が多いので、三キロぐらいのバターがいります。
 d. 一般に、カタカナ料理は脂肪が多かったり、うま味調味料がたくさん使われていたりして、子どもが好むものです。
 e. 一般に幼動物の肉は水分が多く、脂肪が少ない。 (いずれも BCCWJ)

「多い／少ない」は数量の多寡を表す形容詞だと言われてきたが、どのような意味で数量の多寡を表すのかは明確にされていなかった。本稿では、「多い／少ない」は、述定する場合には主語名詞句（大主語）の、装定する場合には被修飾名詞句の一側面の特徴について述べると考える。そして、第1節で論じたように、それらの側面は次元が成り立つ領域となる。では、「多い／少ない」の次元は何になるのだろうか。本稿では、それを「数^d」

（d=dimension）と規定し、通常、この要素は言語的には明示されず、「多い／少ない」自体に内在していると仮定する（ただし、一定の条件がそろえば顕在化すると考えられる場合もある。この点については第6節で見る）。

以上の考察をまとめると、以下の表1のように表すことができる。

このラーメンは	量が（＝領域）	多い（次元＝数 ^d ）
団塊世代は	数が（＝領域）	多い（次元＝数 ^d ）
郵便局は	誤配が（＝領域）	多い（次元＝数 ^d ）
京都は	寺が（＝領域）	多い（次元＝数 ^d ）
日本語は	子音が（＝領域）	少ない（次元＝数 ^d ）
日本の水は	軟水が（＝領域）	多い（次元＝数 ^d ）
幼動物の肉は	脂肪が（＝領域）	少ない（次元＝数 ^d ）

表1 「多い／少ない」の次元と次元の領域

本節では、「多い／少ない」は述定する場合には主語名詞句（大主語）が表す物そのもの、装定する場合には被修飾名詞句が表す物そのものの数量を直接表さないことを論じた。次節では、この特徴は「多い／少ない」特有のものではなく、「高い」のような段階形容詞も、「多い／少ない」と同様に、大主語や被修飾名詞の属性を直接表していないことを論じる。

4. 段階形容詞の修飾のあり方

第2節で述べたように、(16)のガ格で表している各名詞句が、次元が成り立つ領域である。大主語が表すものには様々な側面があり、ガ格で表している各名詞句 Y が大主語 X の1つの側面として提示される。

- (16) a. 富士山は高さが高い。
 b. バスケットボール選手は背が高い。
 c. この詩人は人気が高い。
 d. 8月の夏の盛りとはいえ、やっぱり高原は気温が低い。 ((8)の再掲)

「高い／低い」が表す次元と次元が成り立つ領域と、数量形容詞の次元と次元が成り立つ領域の対応関係は表2のようになる。以下では、段階形容詞と X の関係、さらに段階形容詞と Y の関係に基づき、段階形容詞は直接 X を修飾していないことを示す。「多い／少ない」の段階形容詞としての性質を明らかにすることによって、他の数量詞との違いを考えるためのヒントが得られる。

X は (大主語)	Y が (=領域)	段階形容詞 (次元を含む)
このラーメンは	量が	多い (次元=数 ^d)
団塊世代は	数が	多い (次元=数 ^d)
白い馬は	数が	少ない (次元=数 ^d)
日本語は	子音が	少ない (次元=数 ^d)
富士山は	高さが	高い (次元=高さ ^d)
バスケットボール選手は	背が	高い (次元=高さ ^d)
この詩人は	人气が	高い (次元=高さ ^d)
高原は	気温が	低い (次元=高さ ^d)

表 2 段階形容詞の次元と次元が成り立つ領域

まず、(17a)と(17b)、(17a')と(17b')の対比について考えたい。これらの組は、前者がいわゆる述定、後者がいわゆる装定の用法となるが、大主語／被修飾名詞句とそれにかかる形容詞との意味関係はこの二つの用法間で異なることを見る。

- (17) a. 高さが高い／背が高い／年齢が高い／値段が高い／価値が高い／人气が高い／音が高い／気温が高い／湿度が高い…
- a'. 高い高さ／高い背／高い人气／高い値段／高い年齢／高い価値／高い音／高い気温／高い湿度…
- b. その山は (高さが) 高い／その人は背が高い／その歌手は人气が高い／そのコンピューターは (値段が) 高い／その人は年齢が高い／その芸術品は価値が高い／その歌は音が高い／その日は気温が高い／その日は湿度が高い…
- b'. (高さが) 高い山、背が高い人、人气が高い歌手、(値段が) 高いコンピューター、年齢が高い人、価値が高い芸術品、音が高い歌、気温が高い日、湿度が高い日…

これらの例では、「高さ、背、年齢、値段、…」などが「高いか低いか」だけを問題にしている。つまり、「高い」はそれらの名詞句の性質を直接表していると考えられる。これは、述定でも装定でも同じである。

一方、「山、人、歌手、コンピューター…」などには様々な側面があり、それに応じて「高い」と言っても、何が高いのかについてさまざまな可能性がある。例えば、歌手について言えば、「その歌手は {背／人气／出演料…} が高い」のようにいくつかの可能性が考えられる。そのため、述定の場合「高い」は「山、人、歌手、コンピューター…」などを直接叙述していない⁷。装定の場合も「高い」はそれらの名詞句を直接修飾していないと考えられる。

ここで述べている「高い」と「山」の関係と類似した関係は、神尾(1977,1983)による数量詞の2分類に見られる。西山(2003)は、神尾(1977,1983)の分析に基づき、(18a)の各数量詞が主要語の数量を直接表しているのに対し、(18b)における数量詞は主要語の持つ属性を直接述べていないと指摘している。

- (18) a. 3台の車／8人の学生／5本のビン／1リットルの酒／3匹の子豚
b. 2000ccの車／200キロの力士／8畳の部屋／1リットルのびん／300mの東京タワー／10段の階段／26度の部屋

例えば、「2000ccの車」は「排気量が2000ccの車」で、「200キロの力士」は「体重が200キロの力士」で、「8畳の部屋」は「広さが8畳の部屋」であると説明している。述語として使われる場合も同じで、「東京タワーは300mである」のような文は「東京タワーは、Rは300mである」という意味で、Rが「高さ」、「幅」、「バス停からの距離」などといった様々な可能性があると言っている。

(18b)の数量詞と同様に、「Xは高い」において、「高い」はXの属性を直接述べていないということである。「Xは高い」は「XはYが高い」ということであり、「Y」が何であるのかについて様々な可能性がある。そして、「多い／少ない」も、段階形容詞として「高い」と同じく、被修飾名詞そのものの数量を表す用法(18a)を持たず、(18b)のように被修飾名詞そのものの数量を表さない用法しか持たないと言える。

次節では、これまでの分析を踏まえつつ、「多い／少ない」に特有の使用制限について見ていく。

5. 「多い／少ない」の使用制限

これまで、「多い／少ない」は「高い」などの一般の段階形容詞と同じく、「XはYが多い／少ない」という構文においてYで次元が成り立つ領域を指定するということを議論してきた。しかし、第1節で述べたように、「多い／少ない」は他の段階形容詞とは異なる使用制限を持つ。本節では、この使用制限が生じる理由について考察する。

「多い／少ない」は多くの場合単独での使用に強い制限があるが、単独使用が全くできないわけではない。以下の(19a)は容認されないが、(19b)は単独使用であっても容認される。

- (19) a. * (数が) 多い学生が歩いてきた。
b. 定員を増やしたら、ただでさえ(数が) 多い学生がもっと多くなる。

この対比は、それぞれの文における「学生」の解釈が異なることに由来すると考えられる。(19a)は現象描写文であるため、主語の「多い学生」は不特定多数の読みを持たなければな

らない⁸。しかし、第3節で述べたように、「多い+名詞句」は確定した1つの集合と解釈される場合にのみ容認されるため、このような解釈上の矛盾によって容認不可となると考えることができる。一方、(19b)における「学生」は、(ある学校に所属する)学生の集合という解釈になる。主語名詞句が要素(一人一人の学生)を持つ集合であるという解釈は、述部の「もっと多くなる」という表現によっても裏づけられる。なぜなら、「もっと多くなる」と言えるものは数量的に変化可能な集合を表すものでなければならないからである。

ここで注意すべきことは、主語名詞句(大主語)について、集合を表す名詞句であることと複数を表す名詞句であることは同義ではないということである。「人々」という表現は(3a)における「人間」と同じ解釈にならず、「*人々は数が多い」は容認されない。それと同じく、「学生たち」という複数表現は、話者が想定している1つの集合の概念である「学生」とは異なるものである。

仁田(1980)で挙げられている以下の例も、(19b)と同様に分析できる。

- (20) a. 少ない資源を大切にしよう。
b. 多い資源だからといって無駄に使ってはいけない。

これらの場合にも、「資源」の一つの側面としての「量」が問題にされている。実際、「量が」を補っても、容認性は変わらない。

- (21) a. 量が少ない資源を大切にしよう。
b. 量が多い資源だからといって無駄に使ってはいけない。

一方、不特定の読みを強制する文脈に置いた場合、装定用法が要求する「一つの確定した集合」という解釈との間で矛盾が生じ、「{多い／少ない} 資源」という表現は容認されなくなる。これらは「量が」を補ってもやはり容認されない。

- (22) a. *日本には(量が)少ない資源 {がある／しかない}。
b. *海底から(量が)多い資源が見つかった。

以上のように、「{多い／少ない} X」という装定における名詞句は確定した集合としての解釈を持ち、その一側面として「数／量」が解釈可能になる場合に限り容認されることが明らかとなった。

6. まとめと今後の課題

本稿では、段階形容詞が装定用法および述定用法で使用される際には、次元が成り立つ

領域と次元の両方が不可欠であり、それが意味的および構文的にどのような関係にあるかを明らかにした。具体的には、多寡を表す段階形容詞「多い」と「少ない」において、次元としての「数^d」と次元が成り立つ領域の「数／量」が異なる言語的要素として存在し、次元は段階形容詞に内在する抽象的な概念であり、次元が成立する領域は（典型的には）二重主語構文のガ格名詞として具体的に現れるとの提案をおこなった。さらに、「高い」も次元が抽象的な概念である「高さ^d」を内包していることを示し、抽象的な概念の次元の存在は段階形容詞一般に成り立つことを論じた。そして、「多い／少ない」は比較構文と存在構文に現れる場合にしか直接、被修飾名詞句を量化しないことを示した。また、「多い／少ない」の使用制限は、「多い／少ない」がかかる名詞（述定の場合は大主語、装定の場合は被修飾名詞）の一側面として「数／量」が解釈できる場合に限られることを主張した。

今後の課題の1つは、「多い／少ない」と「多くの／少しの」の違いである。前者は段階形容詞で、被修飾名詞そのものの数量を直接表さないのに対し、後者は段階形容詞ではない（そもそも品詞的に形容詞ではない）ために、直接に被修飾名詞そのものの数量を表すことができると考えれば、両者の差が説明されると思われる。

- (23) a. *多い人／多くの人が歩いてきた。
b. *少ないご飯／少しのご飯を食べた。

もう1つは、本来抽象的な概念である「多い／少ない」の次元が具現化する場合としない場合があるという現象である。例えば、第3節で挙げた(14),(15)の例は、「XはYの{数／量}が{多い／少ない}」と言いかえることができる。この場合は明示される「数／量」は領域ではなく、次元に対応するのではないかと考えられる。そのバリエーションとして、「この大学は学生数が多い」のように、具現化した次元とその次元の領域Yが複合語として現れていると思われる場合もある。また、(24)では、ガ格名詞句が出来事と解釈され、「多い／少ない」が単純な数量というよりは頻度の多寡を表している。

- (24) a. 郵便局は誤配が多い。
b. 最近の車、バイクは故障が少ない。
c. 年子の男の子は喧嘩が多い。
d. 秋の学校は行事が多い。 (いずれも BCCWJ)

これらを表にまとめると以下ようになる。

	次元が成り立つ領域	次元	多い／少ない
--	-----------	----	--------

人間は	数が		多い
京都は	寺が	数が	多い
カナダ料理は	脂肪が	量が	多い
最近の車は	故障が	回数が	少ない
矢作川は	水量が		多い
中国は	人口が		多い

表3 「多い／少ない」の次元とその次元が成り立つ領域

本稿では、先の表2のように「多い／少ない」の次元を「数^d」という抽象度の高い要素として設定したが、表3のように、数量の多寡が表される対象の性質によっては、その次元が「数」「量」「回数」などと具現化することがあると捉えられるのではないだろうか。これらのことをどのように統一的に説明できるのかを検討する必要がある。

¹ ここで、「多さが{多い／少ない}」ではなく、「{数／量}が{多い／少ない}」という形を用いるのは、「多さ」という語彙の意味的特徴による。「高さ」という語彙が中立的に垂直方向の距離を表すのに対し、「多さ」は「多いこと」を意味しており中立的な数量を表すことはない。このことは、「高さが低い」が容認されるのに対し、「*多さが少ない」が容認されないことからわかる。形容詞の名詞化された形式（「一さ」による派生）がどちらの意味になるかは語彙的に決定されていると考えられる。

² 「BCCWJ」は、『日本語書き言葉均衡コーパス』の略称である。本稿では、コーパス検索アプリケーション『中納言』（<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>）を使用して検索を行った。

³ 「jaTenTen11」は「Japanese Web 2011」の略称である。本稿では、コーパス検索を Sketch Engine (<https://www.sketchengine.eu/>) を使用して行った。

⁴ 尾上（1998）、尾上他（1998）、小川他（2020）は「XはYが<形容詞>」という構造の文を二重主語構文と呼んでおり、本稿もそれらに従うこととする。Xに当たる名詞句を大主語と呼ぶことにする。

⁵ 小川他（2020）は「Xは～が高い」といった構文が(i)のように次元が Referential Phrase 指定部を占めるという基底構造をもつと解釈し、「高さが高い」における「高さが」の部分が Phonetic Form で削除されるとしている。

(i) [TP Xは…[_{VP} [_{RP} 高さが[_R R [_{AP} 高い]] v(ϕ)] T(ϕ)]

⁶ 査読者の一人から、(2)の文が不自然なのは文脈の問題であり、文脈が想定しやすければ、(2)も言えるようになるのではないかという指摘を受けた。実際に、(2)のような文が、集合としての解釈がない場合や比較構文、存在構文以外でも容認されるような場合があるのかどうかは現段階では不明である。今後の検討課題としたい。

⁷ 査読者の一人から、叙述対象が述語に近いガ格名詞句になるのは統語構造上の問題ではないかというコメントがあった。本稿は、意味解釈を中心に考えたため統語構造の問題は十分に議論できなかった。今後の検討課題としたい。

⁸ このことは、佐野（2017）が指摘する「多い」が眼前描写文の述語に生じしないという制約に関連していると思われる（「*（戸棚を開けて）あ、虫が多い！」）。本稿では「多い／少ない N が<述部>。」という構文を扱っているため、佐野（2017）の指摘がそのまま適用できるとは限らないが、「多い／少ない」の意味的な特徴が関係している可能性は高い。今後の検討課題としたい。

参考文献

- 今井忍 (2012) 「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのかー＜存在＞の意味成分に基づく再検討ー」『日本語・日本文化』38. 53-80 大阪大学
- 小川芳樹・新国佳祐・和田裕一 (2020) 「「Xは高い」と「Xは高さがある」の比較から見た尺度構文の統語構造」由本陽子・岸本秀樹編『名詞をめぐる諸問題：語形成・意味・構文』.150-173 開拓社
- 尾上圭介 (1998) 「文法を考える 主語 (4)」『日本語学』17 卷 3 号. 96-103 明治書院
- 尾上圭介・木村英樹・西村義樹 (1998) 「二重主語とその周辺」『言語』11. 90-108 大修館書店
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックスー日本語の変形をめぐる論議への一資料ー」『言語』6.9. 83-91 大修館書店
- 神尾昭雄 (1983) 「名詞句の構造」井上和子編『日本語の基本構造』77-126. 三省堂
- 佐野由紀子 (2016) 「「多い」の使用条件について」『日本語文法』第16号 pp.77-93.
- 佐野由紀子 (2017) 「多寡を表す形容詞と存在表現について」『語彙論的統語論の新展開』pp.33-45 くろしお
- 菅井三実 (2002) 「構文スキーマによる格助詞「が」の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』12. 175-191 国際交流基金日本語国際センター編
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論ー指示的名詞句と非指示的名詞句ー』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお
- 仁田義雄 (1975) 「形容詞の結合価」『文芸研究』79. 59-69 明治大学文芸研究会編
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院
- 包雅梅 (2022) 「「多い／少ない」の段階形容詞としての特徴についてー段階形容詞としての特徴についてー」『間谷論集』第16号. 63-81 日本語日本文化教育研究会
- Cresswell, M. J. (1976) The semantics of degree. In B. Partee (ed.), *Montague Grammar*. 261-292. New York: Academic Press.
- Kennedy, C. (1999) *Projecting the Adjective: The Syntax and Semantics of Gradability and Comparison*. New York: Garland.
- Kennedy, C. (2001) Polar Opposition and the Ontology of ‘Degrees’. *Linguistics and Philosophy* 24. 33-70
- Kennedy, C & L. McNally (2005) Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language* 81. 345-381